

近代文明への反省

ブラジルで開催される地球サミットに先立ち、平成四年四月十五日から十八日まで、東京において世界各国の賢人が集まり、地球環境保全問題について協議を行った。その二日目の十六日、竹下元首相主催の昼食会に私がゲストとして招かれ、一場のスピーチを行った。少し長いが、その要旨について述べることにしたい。

スピーチをするにあたって少し申し上げておきたいことがある。それは、アメリカ人はスピーチを必ずジョークから始め、日本人は必ず言い訳から始めるということである。アメリカの学会でわれわれが何よりも感心するのは、アメリカ人のジョークのうまさである。日本人は甚だこのジョークが下手であり、またそういう習慣をもっていない。日本人は、いかに自分がつまらない者であり、このような会議にスピーチをする資格がないかを長々と語り、指名されたからやむを得ず耳を汚すスピーチをさせていたきたいというのである。

現在。アメリカと日本の間には文化摩擦があるというが、このようなスピーチの始め方もまた文化摩擦の原因の一つになっているのではないかと思う。アメリカ人は日本人のこういうスピーチを聞いて、日本人は偽善者だと思い、ひいては日本人を嘘つきだと思うにちがいない。また日本人は、アメリカ人のスピーチを聞いて、アメリカ人は不まじめだ、ひいては怠け者だとも思うかもしれない。私は、日本人はアメリカ人から少しジョークの言い方を習い、アメリカ人は日本人から少し謙遜の仕方を習ったほうが、この二つの国の関係はうまくいくのではないかと思う。

私はふつうの日本人のような謙虚さをもっていないので、弁明からスピーチを始めることも、またアメリカ人のように上手なジョークを言うことができないので、ジョークからスピーチを始めることもできない。それで。私は。日本でいちばん信者の多い仏教の宗派、浄土真宗の宗祖である十三世紀の人、親鸞上人の言葉から始めたいと思う。それは「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という言葉である。彼は、善良な人、賢明な人は自分の善や賢さを頼む心があるので、ひたすら阿彌陀仏を信じることができず、かえって悪い人間や愚かな人間が熱い信仰の心をもっていることをこの言葉で表した。この言葉を今の世界の現

状に当てはめるとどうなるか。私は、地球環境の危機について最初に警告したのは決して賢人でも善人でもなく、それは愚人であり、悪人であったと思う。

日本に例をとると、明治三十九年（一九〇六）に神社合祀令によって古い神社が廃止され、その廃止された神社の木が切られ、数々の貴重な植物や動物が絶滅することにただ一人抗議をし、ドニーキホーテのように戦った南方熊楠は。それによって監獄に入れられ、当時の人から全く愚かな奇人学者といわれ嘲笑された。またおそらく近代日本文学においてただ一人、木々や花や虫の語る言葉を理解し、すばらしい詩と童話を残した宮沢賢治は、生前全く世に知られず、彼は自らをでくの坊と呼ぶ、いささか自嘲の響きのある詩を作っている。

この場合、地球環境の破壊を警告した人はあくまで愚かな人であり、悪い人であった。賢い、しかもよい人間たちはやはり固く科学と技術を信じ、歴史の進歩を信じ、そういう愚かな悪い人間の声に耳を貸さなかった。しかしそういう愚かな悪い人間たちが何十年も前に叫んだ警告が、今初めて賢い人の耳に響いてくるようになったのである。それで、今日もそういう世界の賢人が集まる会議で、地球環境の問題を議論することになったのであるが、私は、ここに集まった賢人の皆さんに、「賢人なおもて地球環境の危機を知る、いわんや愚人においてをや」という言葉を送り、一人の愚人の憂いを語りたいと思う。

今、地球環境の危機が大いに叫ばれている。それは数えあげればきりがない。たとえば、酸性雨、オゾン層の破壊、地球の温暖化、森の死滅、地球の砂漠化、海の汚染、どれ一つとっても、長い目でみれば地球上における人類の生存を不可能にする現象である。この地球環境保全の問題はまさに現在の人間が国の利害。あるいは個人の利害を超えて当たらねばならない重大な問題であるのに、今、人類はまだ当分。私の生きていく限りは大丈夫だと思い、口では地球環境保護が大切だといいつながら、このような地球環境の破壊に対して決定的に有効な政策を何一つとることのできない状況にあるように思う。

私はそういう人類の有様を見ると、大乘仏教の重要な經典である法華経の比喻を思い出す。家がぼうぼう燃えて、火に包まれているのに、まだ子供たちはその中で遊び戯れている。人間の救済を願う菩薩は、この

遊び戯れている子供たちをどうして火の外に出すかを考えているという比喩である。

私は、この比喩は現代の地球とその中における人間を説明するのにもっともよい比喩であると思うが、このような環境破壊というものはいつ始まったのか。それは第二次世界大戦以後の高度に発達した工業社会においてでも、産業革命とともに始まったことでもなく、農耕牧畜文明の発生とともに、あるいはさらにこの農耕牧畜文明によって蓄積された富の上に築かれた都市文明とともに始まったと考えるべきであると思う。

都市文明を作ったのは、メソポタミア地方に最初の都市国家を作ったシュメールの王ギルガメシュであるといわれる。ギルガメシュのことを記した叙事詩が、今日、断片のより合わせの形で残されている。それによれば、ギルガメシュが最初にしたことは森の神ウンババの殺害であった。これはまことに象徴的な意味をもっている。森の神の殺害は森の破壊の自由を人間が獲得したことを意味する。おそらくそれ以前は、森には森の神がいて、森の木をむやみに伐採し、森を破壊する人間に恐ろしい罰を与えていたにちがいない。しかし都市文明の創造者ギルガメシュは、人間をそういうタブーから解放する。そしてこの森の神の殺害は人々に森の破壊の自由を許し、大量の森が消失したにちがいない。

森の破壊は、このように農耕地及び牧草地の拡大を意味するとともにそこから伐採される木材を宮殿建設や神殿建設に利用できるのである。また、新たに人類が発明した金属器の鑄造は多量の木材を必要とする。森の破壊は農耕地及び牧草地の拡大と木材の多方面な利用と一石二鳥の効用をもっている。

このようにして人類は文明を築いてきた。今日、古代文明が栄えたとされる四つの先進文明地帯、チグリスユーフラテス河流域のメソポタミア地方、ナイル河流域のエジプト地方、インダス河流域の西インド地方、黄河流域の北中国地方、いずれを旅しても森を見ることが稀である。

昨年の秋、私はギリシャとトルコに約半月の旅をした。ギリシャ文明の跡を訪ねての最初の旅であり、青春時代の夢が甦るような旅であった。ホメロスやソフォクレスやソクラテスの思い出の残る土地を訪ねることは。私にとって強い感激であったが、私を悲しませたのは、ギリシャの自然の荒廃であった。山には木がなく、川には水がなく、森がないためか。海にはあまり魚がいなかった。かつてギリシャ文明が栄えた当時、

ギリシヤは森に恵まれた国であつたといわれる。

私の友人で花粉分析という学問をしている学者が、ギリシヤで何年か土壌を採取し、そこに含まれる花粉を分析した結果、ギリシヤにおける森の消失は、ギリシヤ文明のそれぞれの最盛期と重なるという結果を明らかにした。ミケーネの森が消失したのは、『イリアス』で語られるトロイア戦争の当時であり、アテネの森が消失したのは、アテネが永遠に後世に残るあのすばらしい文化を創造した時であるという。

私はまた、クレタでミノス文明の跡を見た。それはギリシヤ本土で発達した文明より一時代前の文明であるが、ミノス王の宮殿に華麗な壁画が残っていた。それはどこか日本の大和絵を思わせる絵であり。空には多くの鳥が飛び、地には多くの花が咲き、海や川には多くの魚が泳いでいる絵である。がってのクレタはこのような豊かな自然をもった国であつたにちがいない。その壁画に。抽象面に似た絵が描かれていた。それは巨大な渦巻き連続であり、その連続した渦巻き間にロゼッタの花が描かれていた。説明によれば。渦巻きは循環の理を表し、ロゼッタの花は死者の魂を表すという。全ての自然は循環し。人間も自然の如く、その魂がこの世とあの世の絶えざる循環をするという思想がそこに示されていたわけである。

この渦巻きの文様は、人類が農耕牧畜を發明する以前から人類が所有しているある哲学を示していると思う。それは、全ての生きとし生けるものには霊があり、その霊はこのような永遠の生死の循環を続けるという哲学である。このミノス王の宮殿の壁画は、まさにそのような人類の共生と循環のもつとも古い哲学を語るものであると思うが、クレタ文明の最盛期には既にこのような循環を不可能にするものがあつたにちがいない。

このようにみると、文明は森のあるところ、あるいは森のあるところの近くで生まれ、そして森を食いつくして滅び、また別の場所に森を求めて旅をするのである。文明は近代になって南から北へと旅をしたが、それは北ヨーロッパや北アメリカや日本を含めた東アジアがまだ豊かな森をもっていたためかもしれない。

近代になってヨーロッパはまた全く新しい文明を生み出す。それはいわゆる科学技術文明であり、それを生産に利用した工業文明である。こ

の文明は自然に対してきわめて正確で緻密な認識の体系である自然科学を所有し、人間がその科学によって自然を支配する技術を所有している。この科学と技術により人間は自然を支配し、それ以前の農耕牧畜社会の人間が思いもよらなかった豊かな物質を生産した。これはかつて農耕牧畜の発明によって人類が都市文明を作った人間生活の革命に匹敵する、あるいはそれ以上の革命である。

この第二の革命を指導した賢人はいったい誰か。それはギルガメッシュのような個人ではなく、何人かの哲学者がこのような革命に理論的根拠を与えたのである。たとえばデカルト、たとえばベーコン、このような西洋近代に生まれた思想によれば、人間はまさに世界の中心の地位を占める。かつて神が座っていた世界の王座に、不遜にも人間が座ろうというわけである。

そういう人間の不遜なる要求を、デカルトは「コギト・エルゴ・スム」（我思う、故に我あり）という形で表現した。そこでいちばん価値のあるのは思惟する人間である。そしてこの人間の前に立つのは物質としての自然であるが、その自然の法則を人間は客観的に知ることにより、自然はたやすく人間の奴隷となり。それによって人間は自然を征服し、すばらしい富を得ることができるといふ。

たしかにこのような哲学によって近代世界は発展し、人類は今までの人間が思いもよらなかった富を得た。しかしそのように富を得たと思つた瞬間、人間は手痛い自然の報復を受けたのである。自然は本来、奴隷ではない。それは人間というものを生み出した父であり、母であったわけであるが、近代の人間は、己を生み出した父や母である自然を奴隷と誤解したのである。

これが第二次の工業文明による環境破壊であるが、この第二次環境破壊は第一次の環境破壊よりはるかに深刻である。近代の人間が科学技術という巨大な力を所有しているだけ、地球全体の自然の秩序を根本的に破壊しかねないものである。文明は森の近くで栄え、森を滅ぼして旅をするというが、もはやこのような森の破壊は、文明が栄えている当の場所限定されるのではなく、世界全土に及ぶものである。もはや森を求めての緩慢な文明の旅は現在で終わらざるを得ない。

私は、現在はこのような歴史の終末の状況にあると思う。このような歴史の終末を肌で感じているのは、この近代文明を推進してきた賢人で

はなく、むしろ文明に取り残されている愚人ではないかと思う。愚人は今、世界を法華經の比喩のように、火に包まれた家と感じているように思う。その火の中から脱出するにはどうしたらよいか。それは、文明そのものの原理を変えるより仕方がない。われわれはこの環境破壊の原因を第二次環境破壊のみならず、第一次環境破壊までさかのぼらせ、その原因をもとから絶つより仕方がないのである。それは思想の変革であるばかりか、ライフスタイルの変革でもある。

ライフスタイルの変革についてはあまりにも重大な問題なので、ここでは言及を避けるが、思想の問題に関していえば、ギルガメシュやデカルトやベークンの思想を批判し、やはり人間は自然を父とし母として生まれたものであり、自然の中の多くの生きとし生けるものと共生するか生きられないものであるということをはっきり確認する必要がある。

私は、人間には神によつて与えられた自然支配の特権などというものはないと思っている。そしておそらく、個人の存在を絶対のものとしてではなく、長い過去の先祖から、長い未来の子孫へのほんのひとときの経過点とみる視点が必要なのである。

近代の人間観は個人を絶対化し、現在を絶対化する。これは人類の生存にとって甚だ危険な考え方である。長い時間の中でみると、個人の生命というものは、所詮無限の循環を続ける人間という生命の一つの姿にしかすぎない。こういう人生観は、現在の遺伝子科学などで裏づけられている。

日本は明治以来、西洋から近代文明を採用し、日本を近代化してきた。

この日本の近代化は類をみないほどの成功を収め、日本は世界屈指の経済大国になったが、この経済大国は何らの理想らしい理想をもっていない。しかし今、日本はやはり理想を必要としている。いかなる理想をもつべきであろうか。

今の日本は科学技術文明の発展した近代国家であるが、まだ日本の面積の約三分の二は森であり、そのうちの四割は原生林である。日本にこのように森が保存されているのはどういうわけか。日本に農業が移入されたのは約二千年前であり、文明の先進地帯と比べれば甚だ遅く、また日本に移入された農業が牧畜を伴わない稲作農業であることと関係しているかもしれない。水稻農業は小麦農業よりはるかに多くの水が必要で

あり、水を確保するには川がなくてはならず、川を確保するためにはやはり森がなくてはならないからである。それで、日本では水稻農業の神は森の神と共存して今日まできたのである。

日本の宗教は神道と仏教である。もともと神道というものは自然崇拝の宗教でもあった。それはおそらくアジアやヨーロッパでの旧石器時代の宗教と同じような自然の崇拝であり精霊の崇拝であった。それはあるいは自然現象の崇拝であり、あるいは樹木の崇拝であり、あるいは動物の崇拝であった。明治以後い神道は著しく国家主義化したのが、神道はもともと自然崇拝の宗教であった。

また仏教は日本に入り、自然崇拝の色彩を強めた。この日本仏教の原理が「山川草木悉皆成仏」という原理である。これは釈迦の仏教からみればいささか逸脱した思想である。釈迦の仏教は人間の救済を中心にした仏教であるが、日本の仏教は、人間と自然を一体とし、人間ばかりか自然の救済も説く仏教である。日本の仏教には、私が先ほど述べた共生と循環の原理が色濃く働いているのである。

日本の芸術にもこのような共生と循環の原理が働いている。たとえば俳句、たとえば能、たとえば日本の庭など。このようにみれば、日本は自己の文化、伝統の中に地球環境保全という現在及び将来の人類のもっとも緊急な課題に対しても十二分に発言できる原理を所有している。しかも日本は、高度経済成長時代の結果起こった環境破壊に対してかなり有効な手を打ち、決して生産性を低下させない技術を身につけた。

このような伝統と実績を考えると、どうして、日本が地球環境保全運動の先頭に立ち、経済的価値以外追求しない国であるという世界の悪評を一掃し、二十一世紀における人類共通の難題に対して、そのもっている経済力を甚だ有効に活用し努力している国であるという令名を得ようとしなののか、私のような愚人には理解しかねるのである。

最後に、私はここにご臨席になられる世界の賢人に申し上げたい。私たちはギルガメシュやベーコンやデカルトの知恵によって文明をつくってきたが、その知恵は今日において地球環境破壊を招き、人類の生存すら危うくし始めている。地球をこのような危機から救うには、このような長い伝統ある知恵に対して徹底的な反省を加える必要がある。

レヴィ・ストロースは、南アメリカのインディアンの文化にコーロツパ文化と同じ構造があることを発見し、構造主義の元祖となった。私は、

彼を、近代文明を相対化することができたすぐれた思想家として高く評価するものであるが、現代の知恵はさらに一歩進め、今まで未開とか原始とかいう名で軽蔑されてきた民族がもつ深い隠された知恵を学ぶべきであると思う。それらの民族の知恵には、いかにして人間が自然を尊敬し、自然と共存して生きていくかということに関する深い知恵が隠されているのである。

このような人たちは、近代文明を推進した人たちからみれば愚人にちがいないが、愚人は人類の将来に対してほとんど絶望以外のものをもっていないと思う。そのような絶望は、時代の予測として、賢人の楽観よりはるかに正しいのではないか。賢人の欠陥は、愚人が痛感している人類の危機を身をもって感じるができないことであると思う。

ブラジルのサミットが本当に人類文明再生のための第一歩になることを心から願うとともに、そこにおいて日本が自己の文明の伝統の原理を自覚し、積極的な役割を果たされることを強く希望するものである。

梅原猛 一九九二年 東京新聞 「世界と人間 思うままに」より

(注) クロード・レヴィ・ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908年11月28 - 2009年10月30日) はフランスの社会人類学者、思想家。